コーシカ夜話

ユリアン・セミョーノフ（村野克明・訳）

★ロシア人作家ユリアン・セミョーノフ（一九三一～一九九三年）著『出張報告』（Отчёт по командировкам）（一九八六年刊）の内、コーシカ登場の部分を翻訳。著者は多分一ドル＝三六〇円時代（一九七三年二月以前）の日本に出張したのだろう。訳者はこの時代のコーシカは全く知らない。上記表題と文中の［　］内とは訳者による。

……参った参った。銀行に寄って金を引き出すのを忘れていた。一体どこに泊まったらいいのか。

（わが国人は「インツーリスト」［ソ連の国際旅行社］が今やっているような肌理の細かいサービスではなく、少しその程度を下げて外国へ行ってみたらいいのだ。四百ドルを口に咥えて勝手に行ってみたらどうか。そしたら、思い知ることだろう、旅に病むのがどういうことか、よその町に行ってみたり、ホテル「モスクワ」や「メトロポリ」のようなレストランで食事をしたり、上品なホテルに宿泊したりすることが何を意味するのか、おかわりになることだろう。）

友人らに電話した時は、すでにちっぽけな「旅館」を見つけ出していた。その時、彼らに伝えたのは、一泊の値段がそこらにあるような十ドルではなくて三ドルだったことだ。ともかくそこの電話番号は知らせておいた。われに御用の説はどうぞ御捜し下さい、というわけである。

最初、そこに入り込んだ時、「旅館」の玄関番が伝票を差し出して言うには、サービス料金込みで一泊三十ドル（！）とのこと。こちとらは真っ青になった。わが懐中にはセントまで繰り入れて、たったの九ドルしかない。すなわち、宿泊代に三ドル、朝食夕食に計三ドル、（遅い朝食が可能ならば昼食を取るのは食べすぎになろう）、地下鉄に一ドル、日曜日の博物館や映画館巡りに計二ドル、という計算だったのだ。

「だけど、わたしは、お聞きしてきたのです、一晩が三ドルであると」

玄関番は日本語米語会話帳を取り出し、長いこと頁をめくっていたが、遂に、或る文句のところを指さしつつ、その小冊子を押し出してきた。そこにはこう書かれていた。

男にはサービスできない、
女性に対するほどには。

玄関番は気だるげに両眼を伏して乙女の仕種をするや、今度は情熱的な男の真似をして女の手に接吻する格好を見せた。

「あの、そんなサービスなしで、どうでしょう」

と彼氏に質問した。

玄関番は、これまた長いこと、キモノに下駄をつっかけたお婆さんと話し合っていたが、到頭、溜息をついてこう言った。

「気は進まないんだが、まあ、いいでしょう。五ドル頂くがね」

わが気分はまた、険悪になった。別のホテルを探すのに更に二時間位はかかるだろう。そのために博物館と映画館用にとってある一ドルを使うことにもなりかねない。

「二ドルでお願いします」

と言ってから、念のために二本、指を突き出してみた。

「三ドルだね。一セントも負けるわけにはいかないよ」

と玄関番は愛想よく宣った。

さて、行ってみると、わが部屋はちっぽけなもので、四平米の間取りである。ベッドなし、テーブルなしで、隅の方にマットレスがあるばかり。兵隊の背嚢みたいに折り畳まれている。夜になると、そいつがベッド代わりになるわけだ。壁は薄手の竹で出来ており、その向こうでは、アメリカ人の男達と日本人の「サービス」

嬢らが、はしゃぎまくっている。

街をぶらつこうと外へ出た。ただ何となく、別に目的があるわけでもなかったが。すると、「ロシアバー・コーシカ」という看板を目にした。そこは新宿の鉄道線路沿いの袋小路で、横幅二メートルほどのちゃちな通りに面しており、車は入れず、ただバイクのみ乗り込み可能

だ。鉋もかけていないような板を打ち付けた小さなバーが幾つか軒を連ねている。ここは「貧乏酒場」の一角だ。コーシカの中に入ると、スタンドとぎいぎい軋る高椅子が四脚あるのみ。ちょうど三名の日本人の若者らが、幅広のベルトに短剣を吊り下げて腰掛けていた。

かつら頭の婆さまがいて、こちらを見るや、すかさずバラライカを手に取り、歌い出した。

この杯を飲み干そう
タニューシャのため
ああ、愛しいタニューシャのため
飲み干してこそ、注ごうぞ、もう一杯。

「どこから来たの」　婆さまは日本語で尋ねてきた。
「アメリカ人かい」
「いや」と答えた。
「ロシア人だが」
婆さまは突如、何の前触れもなしに、泣き始めた。
「ううう、ロシア人だとよ、ああ、幸せなこった、で、どこの御出身かい、オーストラリアか、それとも、ドイツか」
「ソヴィエトなんだが……」
婆さまはまたもや突然、何の前触れもなく、泣き止んだ。そして断固とした調子で鼻をハンカチで拭き取った。
「そんな馬鹿な」　彼女はそう言った。
「信じられないね」
「なぜかな」
「一人でほっつき歩くことが禁止されてるからさ。バーに来るなんて、滅相もないことだからね」
「つまり、わたしは変節者か……」
「ロシアでは変節に対して首が飛ぶんだよ」
「わが首は強固なり、だが」
「売るものは何もないのかい」
「何を言ってるのかな」
「金［キン］とか、宝石のことだよ。用立ててあげるよ。ツテがあるからね」
「いや、その必要はないよ」
婆さまはグラスを二つ出すと、ウォッカの「スミルノフ」を少々注ぎ出した、わたしの分は二十グラム、御自分には十グラムぐらいに。

底まで飲め飲め
底まで飲めよ

彼女は歌い出した。
「飲みなよ、どうにか首のぶら下がっているボリシェヴィクのお兄さん。ああ、一体、何でまた、ここに来たんだい。こころが痛むよ。わたしは、この五十年間、あそこから来たひとには会っていないのさ。……ペトログラードを出て

チターへ、そこから大連、そして上海へ、最後はここだよ。伯爵令嬢や」

と彼女は叫びながら、炊事場に通じる小窓を開けた。

「来てご覧よ。赤［アカ］の御客さんだ」

「伯爵令嬢」というのは四十五歳くらいの御化粧の濃い女で、不格好な黒のミニスカートを履いていた。彼女が炊事場から現れるや、毛むくじゃらの若者達の一人が、急に突っ立って身を乗り出して、女の手を取った。そして、その手を引き寄せると、女の耳に何事か囁いた。女はわたしの方を眺めながら、「否」のしるしに、首を横に振った。

「ほんとに、あなたはロシアから来たの」　彼女が尋ねた。

「そうさ、ソ連邦からね」

女は、わたしの手に触ると、薄笑いしながら言った。

「何もかも嘘ばっかりね」

日本人達は酒を飲み干すと、騒ぎながらコーシカを出て行った、腰の短剣をうるわしく締め直しつつ。

「どこに泊っているの」　伯爵令嬢が聞いた。

「ホテルだよ」

「ここから遠いの」

「いや」

「どこから来たの」

「モスクワからさ」

婆さまがまた、泣き出した。

「もしも、ロシア人の家庭に宿泊先を替えてもいいなら」と伯爵令嬢はつくり笑いをしてから、言った。

「どうかしら。部屋が二つ、七平米よ。ここでの条件だと、言うことないわ。乳母は」と婆さまを顎で指すと、付け足した。

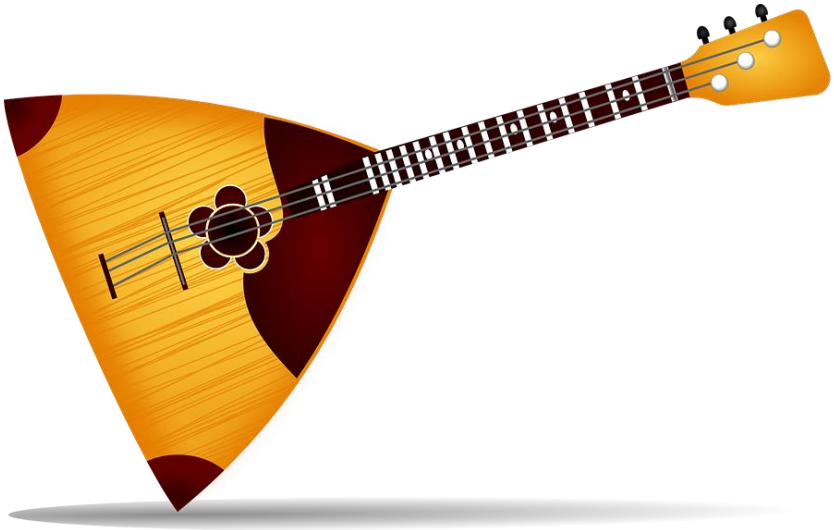
「その時は、ここの床に、寝泊まりするから」

わたしは婆さまの方をちらっと見て、微笑んだ。

「乳母はもう、あなたに言ったのかしら、自分が公爵家の出だということを。わたしが伯爵令嬢であるように、乳母は公爵令嬢なの。もう耄碌してるけど。わたしの方はもっと若いけど……」

（月曜日に「三菱」の或る会社のディレクターに会った。偉そうな、固ぐるしい感じの紳士だが、わが著書を読んでおり、それらを取り出して、わたしにサインを求めてきた。そして、彼氏は慇懃ながら、わたしがどんなホテルに泊っているのかに興味を示し、執拗に「都市センターホテル」を勧めるのだった。

「あそこの部屋はゴージャスです。値段も安く、たったの二十ドルですよ」

わたしがどんな所に泊っているか、この御仁には、知る由もあるまい）。　（了）

【出典】　出版労連・豊島区労協「ナウカ労働組合」機関紙『スクラム』一九九四年一二月二八日号。（『水源地』第四号への転載用原稿の作成、二〇二三年正月。）